1970 年代の高松次郎「平面上の空間」シリーズ作品における ポール・セザンヌからの影響

岩渕 夏樹 （東京藝術大学）

本発表は、戦後日本の芸術家、高松次郎（1936–1998）が 1970 年頃から 80 年代前半にかけて取り組んだ絵画作品シリーズ「平面上の空間」の前期作品について論じるものである。絵画、立体、写真、版画など様々な形式を横断しながら芸術に関する考察を展開した高松については、これまで多くの研究が行われてきた。しかし、この作品シリーズについては発表当時から評価が分かれ、没後も論じられる機会が比較的少なかった。また、高松は近代の芸術家について論じるテキストをいくつか寄稿しているが、それが作品の分析において参照された例はわずかである。そこで本発表では、高松がポール・セザンヌについて述べた文章を読み解くことで、彼がどのような論理を学び得たのか明らかにし、「平面上の空間」が制作された狙いを考察する。

「感覚の実現」というよく知られた言葉の通り、セザンヌは自然を、目の当たりにしたときに与えられる感覚的なものをも含めて、絵画として描き出そうとした。高松はセザンヌの画業の中でも、とりわけ 1880 年代半ば以降に制作された作品に着目する。この時期には、油絵具を盛り上げるように置くことを止め、小さな色彩の面を連続して配置するように描いたり、紙の物質感をありありと示す水彩画に取り組んだりしていた。高松は、自然と感覚的なものとを絵画としてまとめ上げるための以上のような方法を、絵具や支持体といった絵画のリアリティを残すことで自然のアクチュアリティを実現する試みであった、と解釈する。また、それが実現する場を「中間的な性格の領域」と呼び、もとより実現不可能であるが、それでもなお「感覚の実現」を追い求めることの意義を高松は重視している。

高松はセザンヌの作品に読み取った思考とその方法を自分なりに読み替えて制作に結実させる。「アクチュアリティ」と「リアリティ」を事物の「部分」と「全体」に置き換え、把握不可能な全体への志向を高松は重要視した。それを 1970 年代の「平面上の空間」シリーズで造形化させたのである。この作品には、キャンバスや紙といった矩形の大きさから必然的に導き出されるポイント、線、面が描かれている。それらは、いうなれば支持体に潜在する「部分」の表出であり、平面上で連関し合うシステムを構成している。そうすることで、一点透視図法や遠近法といった現実世界のイリュージョンとしての奥行きとは異なる、平面独自の空間が「全体」として現れうるのである。

高松のセザンヌ論を他の研究者のセザンヌ分析を参照しながら読み解き、制作における思想的な背景を考察することで、「謎」とも言われてきた 1970 年代以降の絵画作品に込められた絵画に対する思考を明らかにするとともに、同シリーズの後期作品や後継の絵画シリーズの研究に一つの見地を提示することができるであろう。